

行者像復活で法要

世界遺産の 大峯奥駈道 心穏やかに宿出発

下北山村の世界遺産「大峯奥駈道(おおみねおくがけ)道」で、修験道の行場・第19番摩(まびき)の行仙行者堂にまつる役行者像が修復され、今日17日、京都・聖護院門跡から宮城泰年門主ら6人が出仕して開眼法要が営まれた。

行者堂は、奥駈道の南半分約45きを復興整備した有志団体「新宮山彦るゝぶ」(川島功世話代表)が平成2年に山小屋「行仙宿」とともに建た。

行者や登山者も利用する、南奥駈道整備活動の主要な拠点で、悲願の水場が見つかったことから行者堂をまつ

り、グループの願いを受け、聖護院が役行者像を寄進した。

同像は明治政府が修験道を禁止した際、各地から聖護院に預けら

れた仏像の中の一つ。高さ約60センチ、奇木造り。両手が折れるなど傷みが激



行仙行者堂に営まれた役行者像修復開眼法要。17日、下北山村の行仙宿

しく、解体して組み直し、彩色を施した。胎内から元禄15(1702)年の願文が見つかっている。

開眼法要には新宮山彦るゝぶのメンバーや下北山村の関係者ら計約60人が参加。同じるゝぶの玉岡麗明・初代世話代表(92)は南奥駈道復興を見守っ

た行者像に感謝。宮城門主も同グループの労苦と奉仕精神をねぎらい、「行者像にも、修験道にも、南奥駈道にも歴史背景があり、大変多くを物語っておられる行者像。手を合わせ、心穏やかになってまた出発してほしい」と奥駈道を歩き、守る人々の幸せを願った。